

『阿弥陀経』における「衣械」という語について

畝 部 俊 英

はじめに

鳩摩羅什訳『阿弥陀経』（以下『阿弥陀経』という）に、次のような箇所がある。

其国衆生、常以清旦、各以衣械、盛衆妙華、供養他方十万億仏。即以食時、還到本国、飯食経行。¹⁾

（その国の衆生、常に清旦をもって、おのおの衣械をもって、もろもろの妙華を盛れて、他方の十万億の仏を供養す。すなわち食時をもって、本国に還り到りて、飯食し経行す。）

極楽国土の衆生たちは、毎朝、各自が衣械にもろもろの妙華を盛れて、他方の十万億の諸仏を供養するために、極楽から出かけて行く。そして昼までに本国である極楽へ帰り、飯食し、経行する、というのである。この箇所に対応する梵文は次のようである。

tatra ye sattvā upapannās ta ekena purobhaktena koṭīśatasahasraṃ buddhānāṃ vandanty anyāṃl lokadhātūn gatvā, ekaikaṃ ca tathāgataṃ koṭīśatasahasrābhiḥ puṣpavṛṣṭibhir abhyavakīrya punar api tām eva lokadhātum āgacchanti divāvihārāya.²⁾

（かしこに生まれたところの衆生たちは、一〔朝〕食前に、他のもろもろの世界に行って、十万コーティの諸仏を礼拝し、いちいちの如来に十万コーティの花々の雨をふりまいて、昼の休息のために、再びかの世界に帰って

くる。)

梵文には、「各以衣械、盛衆妙華」にあたる箇所がない。したがって、『阿弥陀経』における「衣械」の梵語が何であるかは不明である。そこで、チベット訳も含めて、関連する諸仏典によって梵語が何であるかを始めとして、その意味などについて、「衣械」をめぐる諸問題を取り上げて、論じてみたい。

1

先ず、これまで「衣械」という語がどのように理解されてきたかを、仏教辞典類で見ておこう。『望月仏教大辞典』（以下『望月辞典』という）には、

エコク 衣械 物名 衣の裾の意。又衣核に作る。花を盛るもの。法華経第二化城喻品に「衣械を以て諸の天華を盛り」と云ひ、阿弥陀経に「各衣械を以て衆の妙華を盛り、他方十万億の仏に供養す」と云ひ、又諸仏境界撰真実経卷上に「各身に著くる所の天衣を脱し、手に衣械を執り、空中に回転して以て仏に供養す」と云へる是れなり。吉蔵の法華義疏第八に「真諦三蔵云はく、衣械とは是れ衣箱なりと。今謂はく衣の前衿なり」と云ひ、又玄応音義第八に衣械は衣襟なりと云ひ、窺基の阿弥陀経疏にも「衣械とは衣衿を謂ふなり」と云ひ、又智円の阿弥陀経義疏には「衣械とは古釈に云はく衣襟なりと。真諦云はく「外国に華を盛るの器なり」と云へり。之に依るに真諦は衣械を以て華を盛るの箱とし、支那の諸家は単に衣の前衿となせるを見るべし。天台の説と伝ふる阿弥陀経義記に「衣械は是れ華を盛るの器なり、形函の如くにして一足あり、手に擎げて供養す」と云へるは、恐らく真諦の説に基けるものなるべし。梵文法華経には、上記化城喻品の文に相当する所に、divyāṃ sumerumātrāṃ puṣpapuṭāṃ gr̥hya（大さ蘇迷廬の如き天の華の puṭa を執りて）とあり。puṭa には、木の葉を以て作れる容器、又は囊、又は身に纏へる一種の巾の意味もあれ

『阿弥陀經』における「衣械」という語について

ば、衣械の訳は後の義を取り、真諦の説は囊の義に依りしものか、未だ詳ならず。又慧琳音義第七十八、希鱗音義第九、阿弥陀經疏鈔第三等に出づ。³⁾

とある。その他の仏教辞典類も、典拠や解説はほとんどこの『望月辞典』と同じであるが、比較的に最近出版された『仏教語大辞典』では、

【衣械】えこく ①械は衿。肩に掛けて手をぬぐうことなどに用いられる布片。衣のすそ。＜『碧巖録』六則＞＜『祖庭事苑』＞ ②花を盛る器で、形は箱に似ている。花皿。③花かご。＜『阿弥陀經』④12卷347上＞＜『要集』119⁴⁾＞

とあり、また、『仏具辞典』には、

衣械 えこく 華を盛る器具。華械ともいう。『阿弥陀經』に「各衣械を以て衆妙華を盛り、他方十万億の仏に供養す」とあり、『法華經』（化城喻品）に「各衣械を以て諸天華を盛り……」とある。『法華文句』（五下）に「三蔵法師云わく。衣械とは是れ外国に花を盛るの器なり」とあり、智円の『阿弥陀經義疏』も真諦の説として同様のことを述べている。その形状は『法華義疏』（第八）に「真諦三蔵云わく、衣械とは是れ衣箱なり」という説が紹介されており、また、智顗の『阿弥陀經義記』は「衣械は是れ華を盛るの器なり、形函の如くにして一足あり、手に擎げて供養す」と真諦の説を継承している。したがって、衣械は函形の浅い容器であったと考えられる。しかし、衣械の解釈には異説もあった。基窺の『阿弥陀經疏』の「衣衿」とする説、『玄応音義』（第八）の「衣襟」とする説などはこの例である。『諸仏境界撰真実經』（卷上）の「各身に著くる所の天衣を脱し、手に衣械を執り、空中に旋轉して以て仏に供養す」という記述から考えると、衣械は天衣の一部分で、これに華を盛って仏に供養したと考えてよい。いずれにしても、インドで高貴の人に華を捧げる時の習俗によるものであり、華籠はこれを模したものといわれている。すなわち、『乳味鈔』（15）

『阿弥陀経』における「衣械」という語について

に「衣械とは華籠にして、即ち散花菩薩の三形なり、其の垂るる紐は即ち瓔珞なり」とある。⁵⁾

と述べている。

以上、仏教辞典類に見える「衣械」についての解説の二、三を取り出してみたのであるが、その仏典の用例として、『阿弥陀経』、『妙法蓮華経』（以下『法華経』という）・「化城喻品」、そして『諸仏境界撰真实経』（以下『撰真实経』という）を上げ、中国における『阿弥陀経』と『法華経』の経疏類の解釈と『玄応音義』の所説を引き、「衣械」の意味として、次の四、五の説が出ている。すなわち、

- (1) 花を盛る器、花かご
- (2) 衣箱
- (3) 囊
- (4) 衣衿、衣襟（天衣の一部分で、これに華を盛って仏に供養する。）
- (5) 衣のすそ

である。なお、『法華経』・「化城喻品」の箇所に対応する梵文『法華経』の文により、『望月辞典』では、「衣械」の梵語を puṭa にあて、その意味として「木の葉を以て作れる容器」と述べていることが注目される。

2

上述のように、仏教辞典類は共に「衣械」という語の用例を『阿弥陀経』、『法華経』、『撰真实経』の三つの經典より取り出しているのであるが、
二 一 他の經典には出てこないのであろうか。もし出てこないとすれば、『阿弥陀
一 経』は鳩摩羅什が弘始4年(402)⁶⁾に、『法華経』は同じく鳩摩羅什が弘始8
年(406)⁷⁾に訳出し、『撰真实経』は般若が建中2年(781)～元和5年(810)
の間に訳出した⁸⁾と見られているので、「衣械」という語は、『阿弥陀経』が

『阿弥陀経』における「衣械」という語について

初出ということになり、『法華経』にも見出され、しかも、後に取り上げるように、「衣械」の前後の文も同じような言い方であらわされているので、鳩摩羅什の用いた訳語ということになるのであるが、果たしてそれでよいのだろうか。この点について、『大正新脩大藏経』（以下『大正蔵』という）の経と律関係の仏典に見出される「衣械」という訳語を調べてみると、次のような結果となる。

「衣械」という訳語・出典一覧表				
仏典名	訳出者	訳出年(A.D.)	『大正蔵』(頁、段)	
須真天子経 ⁹⁾	竺法護	266	15	(111、下)
密迹金剛力士会 ¹⁰⁾	竺法護	288	11	(63、中)
漸備一切智徳経 ¹¹⁾	竺法護	297	10	(492、中)
阿差末菩薩経 ¹²⁾	竺法護	307	13	(586、中)
無量清浄平等覚経			12	(288、中)
阿弥陀経 ¹³⁾	鳩摩羅什	402	12	(347、上)
十誦律 ¹⁴⁾	鳩摩羅什	404	23	(51、中)
法華経 ¹⁵⁾	鳩摩羅什	406	9	(12、中)
法華経	鳩摩羅什	406	9	(23、上)
自在王菩薩経 ¹⁶⁾	鳩摩羅什	407	13	(932、中)
摩訶僧祇律 ¹⁷⁾	仏陀跋陀羅・法顕	418	22	(358、上)
如来智印経 ¹⁸⁾			15	(471、中)
維宝蔵経 ¹⁹⁾	吉迦夜・曇曜	472	4	(497、下)
大莊嚴法門経 ²⁰⁾	那連提耶舎	583	17	(832、上)
毘奈耶雜事 ²¹⁾	義淨	710	24	(225、上)
諸仏境界撰真実経 ²²⁾	般若	781~810	18	(271、上)

「衣械」という語は、『大正蔵』の経と律関係の仏典で、管見の及ぶ限りにおいては、上の「一覧表」のようである。すなわち、この「一覧表」によれば、「衣械」という訳語は竺法護が初めて用いたことになる。鳩摩羅什は竺法護の訳語を踏襲して使っているのである。しかも、後に取り上げるよう

に、鳩摩羅什は「衣械」という語を使う前後の文章表現も、竺法護の訳文に従っている。

なお、『無量清浄平等覚経』（以下『平等覚経』という）にも、「衣械」という訳語がある。「衣械」という語は、上の「一覧表」に見られるように、用例の少ない、特殊な訳語である。それが『平等覚経』に見出されるということは、この經典の訳出者問題に一石を投ずることになると思われる。従来、経録類の記述などにより、『平等覚経』の訳出者について、支婁迦讖説、帛延（または白延）説、竺法護説があって、今日に至るまで決着がついていないのであるが、²³⁾「衣械」という一語ではあるが、竺法護が最初に用いた訳語である点において、竺法護説に有利な手がかりが一つ増えたことになる。もし『平等覚経』が竺法護の訳出とすれば、あまり信頼されていない経録ではあるが、²⁴⁾『歴代三寶記』には、永嘉2年（308）の訳出とある。

なお、本稿では、この「一覧表」における鳩摩羅什以後の訳出者による仏典の「衣械」は取り上げない。

3

一〇九
仏教辞典類が「衣械」の用例として出している、『阿弥陀経』における「各以衣械、盛衆妙華」と『法華経』における「各以衣械、盛諸天華」という表現の仕方について、訳出者が同じ鳩摩羅什ということもあって、大変よく似ているのが眼を引くのであるが、実はこのような訳文は、既に竺法護の訳出經典に見出される。すなわち、『大宝積経』所収の『密迹金剛力士会』において「各以衣械、盛好天華」²⁵⁾とある。鳩摩羅什は「衣械」という単語だけでなく、その前後の文も竺法護に倣っているのである。

それでは、次に「衣械」という語は、梵文ではどのように表されているであろうか。『望月辞典』の「衣械」の項では、すでに紹介したように、『法

華経』の梵文の該当箇所が出され、「衣械」の梵語は puṭa となっているのであるが、上の「一覧表」に掲げた、その他の仏典のうちで、梵文原典が存在するものではどのように表されているのであろうか、この点について次に検討してみたい。

4

上の「一覧表」において、梵文原典が現存しているのは、『十地経』の異訳である『漸備一切智徳経』、『無量寿経』の異訳である『平等覚経』、『阿弥陀経』(ただし、本稿の「はじめに」の項に掲げたように、現行の梵文には「各以衣械、盛衆妙華」の該当箇所はないので、該当箇所があるチベット訳を参照する)、そして『法華経』(前述のように『望月辞典』の「衣械」の項に、該当梵文が取り上げられている)である。順次、漢訳と梵文の該当箇所を対照して見ていくこととする。

1) 竺法護訳『漸備一切智徳経』・「金剛藏問菩薩住品」

以是手掌、精進供養十方諸仏。一一手掌、示江河沙華、在諸衣械、以用供養諸仏・世尊。²⁶⁾ * 麗本は械上とあるが、宋、元、明、宮本によって衣械とする。

(この手掌をもって、精進して十方の諸仏を供養す。いちいちの手掌をもって、江河沙 [の数] を示す [ほど多くの] 華、もろもろの衣械 [の中] にあるを、もって諸仏・世尊に供養す。)

参考・尸羅達摩訳『十地経』

以此諸手、慇懃供養十方諸仏。以一一手、各持殑伽沙数花鬘、以散諸仏。²⁷⁾

(このもろもろの手をもって、慇懃に十方の諸仏を供養す。いちいちの手をもって、おのおの殑伽沙数の花鬘を持って、もって諸仏に散ず。)

梵文『十地経』 (Daśabhūmīśvara)

tais ca pāṇibhir daśasu dikṣu buddhapūjāyāṃ prayujyate. ekaikena ca

『阿弥陀経』における「衣械」という語について

pāṇinā gaṅgānadivālikāsamān puṣpapuṭāms teṣāṃ buddhānāṃ bhagavatāṃ kṣipati.²⁸⁾

（[かれは] これらの手によって、十方における諸仏の供養を行う。いちいちの手によって、ガンジス河の砂と同じ [ほどの数多くの] 花々のもろもろの puṭa をかの諸仏・諸世尊に撒き散らす。）

『十地経』では「花簍」と訳されているが、『漸備一切智徳経』では「華、在諸衣械」となっている箇所が、梵文の「花々のもろもろの puṭa を」にあたり、したがって、竺法護は puṭa を「衣械」と訳したことが確かめられる。

2) 『平等覚経』

此十方菩薩飛 皆以衣械諸華 天拘蚕種種具 往供養無量覺²⁹⁾

（この十方の菩薩飛びて、みな衣械の諸華・天の拘蚕・種種の具をもって、往いて無量覚を供養す。）

参考・『無量寿経』

一切諸菩薩 各齋天妙華 宝香無価衣 供養無量覺³⁰⁾

（一切のもろもろの菩薩、おのおの天の妙華・宝香・無価の衣をもって、無量覚を供養す。）

梵文『無量寿経』 (Sukhāvatīvyūha)

bahupuṣpapuṭān grhītvā
nānāvarṇa surabhī manoramān,
okiranti naranāyakottamam
Amita-āyu naradevapūjitam. (2)³¹⁾

（[かれらは] いろいろな色の、芳香のある、快い、多くの花々のもろもろの puṭa を [手に] 持って、人間たちの最上の導師である、人間たちと神々によって供養されたアミタ・アーユ（無量寿）[仏] に散らす。）

『阿弥陀経』における「衣祴」という語について

これは、いわゆる「東方偈」の、梵文では第2偈の箇所である。『平等覚経』には、「皆以衣祴諸華」という句がある。これに対して、『無量寿経』には、「各齋天妙華……」とあって、「衣祴」、またはそれに類する語は見られない。『無量寿如来会』と『無量寿莊嚴経』の相当箇所も同様である。梵文と『平等覚経』とを対照すると、「衣祴諸華」が、「花々のもろもろの puṭa を」に当たると思われる。したがって、『平等覚経』における「衣祴」も puṭa の訳語ということになる。そして、たった一例のことではあるが、『平等覚経』に「衣祴」という、用例の少ない、特殊な訳語が見出されることは、前述のように、『平等覚経』の竺法護訳説に一石を投ずるものと思われる。

3) 鳩摩羅什訳『阿弥陀経』

其国衆生、常以清旦、各以衣祴、盛衆妙華、供養他方十万億仏。即以食時、還到本国、飯食經行。³²⁾

(その国の衆生、常に清旦をもって、おのおの衣祴をもって、もろもろの妙華を盛れて、他方の十万億の仏を供養す。すなわち、食時をもって、本国に還り到りて、飯食し經行す。)

参考・玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』

彼有情類、昼夜六時、常持供養無量寿仏。每晨朝時、持此天華、於一食頃、飛至他方無量世界、供養百千俱胝諸仏。於諸仏所、各以百千俱胝樹花、持散供養、還至本処、遊天住等。³³⁾

(かの有情の類、昼夜六時に、常に持って無量寿仏を供養す。晨朝の時ごとに、この天華を持って、一食の頃において、飛びて他方の無量の世界に至り、百千俱胝の諸仏を供養す。諸仏の所において、おのおの百千俱胝の樹花をもって、持ち散じて供養し、本処に還り至って、天住等に遊ぶ。)

チベット訳『阿弥陀経』(河口本(ナルタン版)、デルゲ版、北京版参照)
der sems can gañ dag skyes pa de dag kyañ sna dro gcig bshin du sañs
rgyas kyi shin gshan dan gshan du don ste sañs rgyas bye ba phrag hbum

la phyag ḥtshal shin | de bshin gṣegs pa re re la yañ me tog skun bu bye
ba phrag ḥbum mñon par ḥthor te | gtor nas ñin mo gnas paḥi phyir
slar ḥjig rten gyi khams de ñid du ḥdon ño ||³⁴⁾

(かしこに生まれたところの衆生たちは、一午前の間に、余・他の仏国土
に行って、十万コーティの仏を礼拝し、いちいちの如来に十万コーティの
花の skun bu をふりまき、ふりまいてから、昼の休息のために、再びも
との世界に帰ってくる。)

鳩摩羅什訳『阿弥陀経』の「各以衣械、盛衆妙華」に相当する箇所は、梵
文には、「いちいちの如来に十万コーティの花々の雨をふりまいて」(ekai-
kaṃ ca tathāgataṃ koṭīśatasahasrābhīḥ puṣpavṛṣṭibhir abhyavakīrya)
とあって、「衣械」という語にあたる梵語はなく、玄奘訳『称讃浄土仏摂受
経』には、「各以百千俱胝樹花」とある。チベット訳には、既に指摘されて
いるように、³⁵⁾この梵文と同じように訳されている箇所をもっているものと、³⁶⁾
全体の内容から見て鳩摩羅什訳からの重訳ではなく、ナルタン、デルゲ、北
京などの版本所収のもので、上に掲げた文のように、「各以衣械、盛衆妙華」
に相当する箇所が「花の skun bu」という語で訳されているものとがある。
ところで、木村秀雄『梵蔵漢対照・阿弥陀経』³⁷⁾の該当梵文の脚註には、次の
ような記述がある。すなわち、

4. 飲光、法護、光覺、puṣpa-pṛiṣṭibhir ; 常明、puṣma-pṛiṣṭibhir.
Puṣpa-puṭibhir suggested by TibT, me tog skun bu, KumāraT, 衣械.
Puṭī, a variation of puṭa (v. Larger Sukhā V, pp. 49, 50, pūṭī).

また、当該チベット訳文の脚註には、

3. …… me tog skun bu, me tog phur ma, translations of Skt.
puṣpa-puṭa.

とある。

現行の梵文『阿弥陀経』(『オックスフォード刊本』³⁸⁾)は、日本に伝承して

『阿弥陀経』における「衣械」という語について

きた悉曇本に基づくものであるが、この脚注によれば、それら諸悉曇本には、「衣械」に相当する語はないこと、チベット訳にある *me tog skun bu* と鳩摩羅什訳『阿弥陀経』の「衣械」という語によって、「各以衣械、盛衆妙華」の梵語は *puṣpa-puṭibhir* であることが示唆されていること、*puṭī* は *puṭa* のヴァリエーションであることが示されている。その理由は、梵文『無量寿経』（『オックスフォード刊本』）の「東方偈」（pp. 49, 50）に *pūṭī* とあるからである、という。このことについて、『オックスフォード刊本』の基ついた写本より古い、恐らく12世紀中葉のものとされている写本を底本とする『足利刊本』⁴⁰⁾ や『写本ローマ字本集成』⁴¹⁾ の梵文『無量寿経』を見ることができ、現在のわれわれにとっては、上の『平等覚経』の項においてその第2偈掲げておいたように、「東方偈」、および「東方偈」より少し後の方の長行には *pūṭī* ではなく、すべて *puṭa* とあることを見逃すわけにはいかないと⁴²⁾ 思う。そして、上で見てきた梵文『十地経』においても、また次に見る梵文『法華経』においても、すべて *puṭa* であることなどを勘案すれば、『阿弥陀経』における「衣械」の梵語は *puṭa* であったと思われる。したがって、鳩摩羅什が漢訳するのに用いた原典にはナルタン版などのチベット訳と同じように、*puṣpapuṭa* という語が存在し、それを竺法護に倣って、「各以衣械、盛衆妙華」と訳したのであろう。

4) 鳩摩羅什訳『法華経』・「譬喩品」

我身手有力、当以衣械、若以机案、従舎出之。⁴⁴⁾

*机は宋、元、明、宮本では凡となつてゐる。

（われ、身・手に力有り、まさに衣械をもってや、若しは机案をもってや、舎よりこれを出すべき。）

梵文『法華経』（*Saddharmapuṇḍarikasūtra*）

aham asmi balavān bāhubalikaś ca, yan nv ahaṃ sarvān imān kumārakān eka-piṇḍayitvotsaṅgen' ādāyāsmād gṛhān nirgamayeyam.⁴⁵⁾

（私は強く、腕の力もある。だから、私はこれからすべての子供たちをひと塊りにして、脇に抱えて、この家から逃げ出させよう。）

鳩摩羅什訳『法華経』には、「衣械」という語がこの「譬喩品」に一箇所、「化城喩品」に四箇所ある。⁴⁶⁾まず「譬喩品」から見てみると、梵文の相応箇所には「衣械」に当たる語はない。『ケルン・南条刊本』以外の、諸刊本や諸写本にも、また、チベット訳にも見当たらない。したがって、この箇所における「衣械」の梵語は、現状では確認できないので、保留とする。なお、竺法護訳『正法華経』にも、該当箇所はない。

『法華経』・「化城喩品」

爾時、五百万億国土諸梵天王、与宫殿俱。各以衣械、盛诸天華、共詣西方。
……即以天華、而散仏上。⁴⁷⁾

（そのとき、五百万億の国土の、もろもろの梵天王は、宮殿と俱に（?）、おのおの衣械をもって、もろもろの天華を盛れて、共に西方に詣る。……即ち天華をもって、仏の上に散ず。）

梵文『法華経』（*Saddharmapuṇḍarikasūtra*）

atha khalu bhikṣavas teṣu pañcāśatsu loka-dhātu-koṭī-nayuta-śata-sahasreṣu ye mahā-brahmāṇas te sarve sahitāḥ samagrās tāni divyāni svāni-svāni brāhmāṇi vimānāny abhiruhya divyāṃś ca Sumeru-mātrān puṣpa-puṭān gṛhitvā catasṛṣu dikṣv anucaṅkramanto 'nuvicarantaḥ paścimaṃ dig-bhāgaṃ prakrāntāḥ. …… taiś ca Sumeru-mātraiḥ puṣpa-puṭaiś taṃ bhagavantam abhyavakiranti sma ……⁴⁸⁾

（そのとき、実に、比丘たちよ、それら五千万・コーティ・ナユタの世界にいたるところの大梵天たちはすべて、みな共に連れだって、それら各自の梵天の、天の乗り物に上り、スメール [山] の量ほどの、天の花々のもろもろの puṭa を [手に] 持って、四方を順次に巡り行き、西方に向かって行った。……そして、かのスメール [山] の量ほどの花々のもろもろの

『阿弥陀経』における「衣祴」という語について

puṭa をかの世尊に散らした。)

「化城喩品」において「衣祴」という語のある四箇所は、梵・漢共に方角をあらわす語を除いて、すべて同じ文であるので、四箇所のうちの、最初の文を挙げてみた。『望月辞典』の「衣祴」の項で既に指摘されているように、「衣祴」の梵語は、puṭa である。

以上で、竺法護訳『密迹金剛力士会』の「各以衣祴、盛好天華」に倣ったと思われる、鳩摩羅什訳の、『阿弥陀経』の「各以衣祴、盛衆妙華」および『法華経』・「化城喩品」の「各以衣祴、盛諸天華」における「衣祴」は、すべて puṭa であることが判明した。なお、『阿弥陀経』の「各以衣祴、盛衆妙華、供養他方十万億仏」（いちいちの如来に十万コーティの花の skun bu = puṭa をふりまき）とある箇所と、『法華経』の「各以衣祴、盛諸天華、共詣西方」（天の花々のもろもろの puṭa を〔手に〕持って……西方に向かって行った）とある箇所では、同じ文ではない。にもかかわらず、一方は「各以衣祴、盛衆妙華」、片や「各以衣祴、盛諸天華」と、同じような表現で訳しているのは、puṣpapuṭa とあれば、竺法護に倣って、「各以衣祴、盛……華」と訳すという考え方が、鳩摩羅什にあったのであろうか。なお、竺法護訳『正法華経』の該当箇所には、「時五百億百千梵天、……以諸天華如須弥山、詣西北角⁴⁹⁾」というような表現は見られるが、そこには「衣祴」という語はない。

ともあれ、『法華経』・「譬喩品」の場合を除いて、ここに取り上げた四つの大乗經典の箇所は、空中より仏・諸仏へ「散華」を行う時の定型表現である。

『阿弥陀経』における「衣祴」は、チベット語では skun bu であり、こ

のチベット語の skun bu から見て、梵語では puṭa であったと思われる。漢字そのものとしての「衣械」という語については、「衣」は「①きぬ。ころも。②つつみ。おほひ。③こけ（苔）。④はね（毛羽）。⑤かは（表皮）⑥もすそ（下裳）」⁵⁰⁾などの意があり、「械」は「①すそ。〔集韻〕械、衣裾也。②布片の名。仏家で用ひるもので、長方形、肩に掛けて、手を拭ひ又は物を盛るに用ひる。〔玉篇〕械、衣械也。〔柳宗元、送文暢上人登五台、遂游河朔序〕蔑衣械之贈…。」⁵¹⁾などとあるが、梵語の puṭa には、如何なる意味があるのであろうか。梵語とパーリ語の辞典を見てみよう。Apte の『梵英辞典』には、puṭa は “1. A fold. 2. A hollow space, cavity, concavity. 3. A cup made of a leaf folded or doubled; a vessel of leaves. 4. Any shallow receptacle. 5. The pod or capsule which envelops young shoots. 6. A sheath, cover. covering. 7. An eye-lid. 8. A horse's hoof.”⁵²⁾ の八義を挙げ、Moniel の『梵英辞典』には、上記の意味と共に “a cloth worn to cover the privities.” という意味が与えられている。⁵³⁾ 要するに、puṭa という語は、ひだ、くぼみ、穴、空間、凹面などを原意として、カップ、容器、カバーとなり、馬のひづめ、まぶたなどの意となっている。容器について、木の葉で作られた容器とあるのが注意される。また、cloth とあるが、特殊な意味で使われていて、辞典で見限る限り、puṭa には、漢字の「衣」に関する意味は、直接的には見当たらないようである。次に、パーリ語の辞典を見てみよう。PTS. 版の『巴英辞典』には、puṭa は “orig. meaning “tube,” container, hollow, pocket.—1. a container, usually made of leaves (cp. J iv. 436; v. 441; vi. 236), to carry fruit or other viands, a pocket, basket: —2. a bag or sack, usually referring to food carried for a journey: —3. a tube, hollow: —4. box.” とある。⁵⁴⁾ パーリ語においても、チューブ、容器、くぼみ、ポケットを原意として、木の葉で作られた、果物あるいは他の食べ物を運ぶための容器、バスケット、バッグ、食べ物を入れる袋、箱の意が挙

『阿弥陀経』における「衣械」という語について

げられている。やはり漢字の「衣」に関係する意味は見当たらないが、袋、ポケットとあることが注意される。衣のどこかに「くぼみ」を作り、物を入れることができ、それを「衣械」と言ったという可能性は十分考えられることであるからである。ところで、ここには、木の葉で作られた容器の用例が、『ジャータカ』(Jātaka)にあることが示されているので、それを見ておきたい。

Fausbøll 本の『ジャータカ』(Vol. V.) には、次のように述べられている。

punadivase tādisaṃ pāyāsaṃ pacāpetvā paṇṇāni aggahetvā dve puṭe
katvā ekasmiṃ pāyāsaṃ pakkhipitvā ekasmiṃ cūlāmaṇiṃ ṭhapetvā …
…⁵⁵⁾

(翌日、上に述べたような粥を煮させ、もろもろの木の葉を取って、二つの puṭa を作らせて、一方の方には粥を入れ、一方の方には宝冠を入れて、……。)

『ジャータカ』における puṭa は複数の木の葉で作られた、物を容れる器のようである。

6

『阿弥陀経』の「衣械」が如何なるものであるのかを結論付ける前に、梵語の puṣpapuṭa とチベット語の me tog skun bu がどのように和訳されているかを、手元にある和訳本で見てみよう。

『十地経』

- 1) 花筐⁵⁶⁾
- 2) 花鉢⁵⁷⁾
- 3) 華籠⁵⁸⁾

『無量寿経』

- 1) 華束⁵⁹⁾ (花束⁶¹⁾、花の束⁶²⁾)
- 2) 華聚⁶⁰⁾
- 3) 花を盛った器⁶³⁾

『阿弥陀経』(チベット訳)

- 1) 花……籠⁶⁴⁾
- 2) 華籠⁶⁵⁾

『法華経』

- 1) 華囊⁶⁶⁾
- 2) 花卉⁶⁷⁾
- 3) 花のうてな⁶⁸⁾
- 4) 花 [華] [を盛った] 器⁶⁹⁾

とある。

以上のような和訳のうちで、これまで本稿で見てきた puṭa の梵語辞典やパーリ語辞典の原意からすれば、花筐、花籠、花を盛った器、華囊という意が該当するように思われるが、梵文の、『無量寿経』と『十地経』における puṭa という語の用いられ方を見ることによって、そのことが裏付けられると思うので、それを次に取り上げてみたい。

7

九
九
先ず梵文『無量寿経』・「東方偈」の第4偈に用いられている puṭa から見ていきたい。(第2偈は既に『平等覚経』の項において挙げてあるので、ここでは省く。)

bahugandhapuṭān gṛhītṛvā
nānāvarṇa surabhī manoramān,

okiranti naranāyakottamaṃ

Amita-āyu naradevapūjitam. (4)⁷⁰⁾

([かれらは] いろいろな色の、芳香のある、快い、

多くの香のもろもろの puṭa を [手に] 持って、

人間たちの最上の導師である、人間たちと神々によって供養された

アミタ・アーユ (無量寿) [仏] にふりまく。)

この第4偈には、「多くの香のもろもろの puṭa を (bahugandhapuṭān)」が出てくる。和訳本のなかには、「花々のもろもろの puṭa 」を「花の束」と訳し、この「香のもろもろの puṭa 」を「香の束」と訳しているものもある。しかし、この香がいかなる形をしたものか分からないが、「香の束」と敢えて訳す必然性があるのではあろうか。この点についてヒントを与えてくれるのは、『漸備一切智徳經』の項において取り上げた、梵文『十地經』の相応箇所と、それに続く文である。すなわち、

taīś ca pāṇibhir daśasu dikṣu buddhapūjāyāṃ prayujyate. ekaikena ca pāṇinā gaṅgānadivālikasamān puṣpapuṭāṃś teṣāṃ buddhānāṃ bhagavatāṃ kṣipati. yathā puṣpānāṃ evaṃ gandhānāṃ mālyānāṃ vilepānānāṃ cūrṇānāṃ civarāṇāṃ chatrāṇāṃ dhavajānāṃ patākānāṃ evaṃ sarvavyūhānāṃ.⁷¹⁾

(これらの手によって、十方における諸仏の供養を行う。いちいちの手によって、ガンジス河の砂と同じ [ほどの数多くの] 花々のもろもろの puṭa をかの諸仏・諸世尊にまき散らす。花々の [もろもろの puṭa をかの諸仏・諸世尊にまき散らす] と同じく、もろもろの香の、もろもろの花環の、もろもろの塗油の、もろもろの抹香の、もろもろの上衣の、もろもろの傘蓋の、もろもろの幢の、もろもろの幡の [もろもろの puṭa をかの諸仏・諸世尊にまき散らす]。同じくあらゆる莊嚴の [もろもろの puṭa をかの諸仏・諸世尊にまき散らす]。)

とある箇所である。

ここには、花や香のみならず、花環、塗油、抹香、上衣、傘蓋、幢、幡、そしてあらゆる莊嚴の puṭa なるものが挙げられているが、この puṭa を「束」、「うてな」などという語で一様に訳すことはできないように思われる。したがって、puṭa は梵語やパーリ語の原意にある「容れ物、器」という意に絞られてくる。

本稿では、上に仏教辞典類における「衣械」の解説を紹介し、五つの意味に纏めてみた。すなわち、

- 1) 花を盛る器、花かご
- 2) 衣箱
- 3) 囊
- 4) 衣衿、衣襟
- 5) 衣のすそ

である。この五つの意味を、梵文『十地経』の文に当ててみれば、次のようである。「花々のもろもろの puṭa」は「花々を盛る器」、「もろもろの香や塗油や抹香の、もろもろの puṭa」は「もろもろの香や塗油や抹香を容れる器」、そして「もろもろの上衣の、もろもろの puṭa」は「もろもろの上衣を入れる衣箱」のことなのである。したがって、puṭa そのものには「かご」とか「箱」などの意があるのではなく、花を盛れば「花かご」、「花皿」となり、衣を置けば「衣箱」になるという「容れ物、器」の意である。この puṭa を竺法護は「衣械」と訳したのである。

九七
なお、上の梵文『十地経』の文は、puṣpapuṭa という二語からなる合成語が puṣpānām puṭa (花々の器) という格限定複合語⁷²⁾で読むべきことを示している。

8

梵文『無量寿経』・「東方偈」の第6偈と7偈にも、puṣa という語があるので、それを見ておこう。

te puṣapuṣebhi punā kiranti
udagracittā atulāya pritiye,
vācam prabhāṣanti punas tu nāyake,
asmāpi kṣetram siya evarūpaṃ. (6)
taiḥ puṣapuṣā iti kṣipta tatra
chatraṃ tadā samsthihi yojanāśatām,
svalamkṛtaṃ śobhati citradaṇḍam,
chādeti buddhasya samantakāyaṃ. (7)⁷³⁾

(かれらは、心がはずみ、無比の喜びをもって、
花々〔を盛った〕もろもろの器を再びふりまく。
そして再び導師に言葉を述べる。

「われわれの国土もまたこのようになるように」〔と〕。(6)

かれらによって、花々〔を盛った〕もろもろの器がそこに撒き散らされ
と、そのとき、百ヨージャナの〔大きさの〕傘蓋となった。

〔その傘蓋は〕美しい柄があり、よく飾られていて、〔きらきらと〕輝き、
仏陀の全身を覆う。(7))

この二つの偈によって、注目せられるのは、仏を供養するために散華が行
われる場合、花だけではなく、花々を盛った器もろともに撒き散らされるこ
とである。この点については、上に掲げた梵文『十地経』でも、チベット訳
『阿弥陀経』でも、梵文『法華経』でも、同じように表されている。このこ
とがよく分からなかったので、puṣapuṣa について、これまでの和訳には

『阿弥陀経』における「衣械」という語について

「花束、花卉、花のうてな」などという訳が行われたのであろう。puṭa は上で取り上げた『ジャータカ』にあるように、複数の木の葉によって作られたものとするれば、器もろともに撒き散らされるとしても、違和感はないように思われる。第7偈にあるように、空中に撒き散らされると、百ヨージャナの[大きさの]傘蓋となったことが表されているが、花々を盛った器と傘蓋のイメージはよく一致すると思われる。これに対して、puṭa を衣のすそとするれば、花々とともに撒き散らすなどということはできないであろう。また、衣と切り離された衣衿や衣襟でも、傘蓋とはイメージ的には合うところはないと思われる。

なお、梵文『無量寿経』では、後半の長行においても、花々を盛った器が空中に投げられと、傘蓋となって現れることが述べられている。⁷⁴⁾

おわりに

以上、『阿弥陀経』における「衣械」という語について、いろいろな角度から検討してみた。その結果分かったことは、『阿弥陀経』における「衣械」という語と「各以衣械、盛衆妙華」という語句、または『法華経』の「衣械」と「各以衣械、盛諸天華」とは鳩摩羅什が最初に用いたものではなく、竺法護訳出經典において初めて見出される訳語であり、その意味で鳩摩羅什は竺法護に倣って用いていること、また、この「衣械」なる語が『平等覚経』にもあることは『平等覚経』竺法護訳説に一石を投ずるものであること、チベット訳『阿弥陀経』における me tog skun bu が puṣpapaṭa と還梵できるとすれば、『阿弥陀経』における「衣械」の梵語は puṭa であること、このナルタン版など版本のチベット訳『阿弥陀経』に me tog skun bu、そして『阿弥陀経』に「各以衣械、盛衆妙華」という語句があることから推して、鳩摩羅什が漢訳するのに用いた原典の〈阿弥陀経〉には puṣpapaṭa という

『阿弥陀経』における「衣械」という語について

語句があったであろうこと、puṭa は「容れ物、器」の意であり、そこに容れる物によって、「花々を盛る器」、「衣を入れる衣箱」などの意となること、その「容れ物、器」には複数の木の葉で作られたものがあること、したがって、散華されるときは、花々を盛った器もろともに投げられることがある、ということなどである。

さて、アジャンターにしろ、敦煌にしろ、法隆寺にしろ、その壁画に描かれている飛天（または菩薩）たちの手にあるのは、花々を盛れた皿状のもののように見えるが、敦煌菩薩と讃えられた竺法護が puṭa という梵語を漢字では衣に関係する「衣械」という語で訳し、亀茲出身の鳩摩羅什がそれに倣ったのは何故であるか。西域の風習が反映しているのであろうか。この点については識者の御教示を得たい。

註

- 1) 『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』という) 12巻、347頁、上段。なお、『無量寿経』の第二十三願(『大正蔵』12巻、268頁、中段)と「供養諸仏」の段(同上、273頁、下段)の一部分とは、この個所と共通する。『無量寿経』には、梵文の相応個所もある。
- 2) *Sukhāvati-vyūha, Description of Sukhāvati, the Land of Bliss*, ed. by F. Max Müller and B. Nanjio (Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. I, Part II, Appendix II, *The Smaller Sukhāvati-vyūha*, Oxford, 1883) p.94, ll. 12-15.
- 3) 『望月仏教大辞典』第1巻(世界聖典刊行協会、1971年、第5版) 273—274頁。
- 4) 中村元『仏教語大辞典』上巻(東京書籍、1975年、第1版) 98頁。
- 5) 清水乞『仏具辞典』(東京堂出版、1992年、第7版) 13頁。
- 6) 『出三』巻二の鳩摩羅什の項に「無量寿経一卷」とあり、その割註に「或云阿弥陀経」(『大正蔵』55巻、11頁、上段)とある。また、費長房撰『歴代三宝紀』(以下『三宝紀』という)巻九の鳩摩羅什の項(『大正蔵』49巻、78頁、上段)。藤田宏達『原始浄土思想の研究』(岩波書店、1970年、第1刷) 107—108頁参照。
- 7) 僧祐撰『出三蔵記集』(以下『出三』という)巻二の鳩摩羅什の項に「新法華経七巻」とあり、その割註に「弘始八年」(『大正蔵』55巻、10頁、下段)とある。ま

『阿弥陀經』における「衣械」という語について

- た、『出三』巻八所収の釈慧観「法華宗要序」（『大正藏』55巻、57頁、中段）と僧叡法師「法華經後序」（『大正藏』55巻、57頁、下段）参照。
- 8）北条賢三「諸仏境界撰真実經・解題」（『新国訳大藏經』インド撰述部、密教部7所収、大蔵出版、1996年）23頁。
- 9）未詳作者「須真天子經記」（『大正藏』55巻、48頁、中段）、および『出三』巻二の竺法護の項（『大正藏』55巻、7頁、下段）による。
- 10）『出三』巻二の竺法護の項（『大正藏』55巻、7頁、中段）。
- 11）未詳作者「漸備經十住胡名并書叙」（『大正藏』55巻、62頁、中段）、および註10）。
- 12）註10）の竺法護の項（『大正藏』55巻、8頁、下段）。ただし、「安録先闕」とあるのを宋、元、明の三本によって「永嘉元年十二月一日出」とする。
- 13）註6）。
- 14）『出三』巻二の鳩摩羅什の項に「十誦律六十一卷」（『大正藏』55巻、11頁、上段）とある。また、『三宝紀』巻八の鳩摩羅什の項に「十誦律五十八卷」とあり、その割註に「弘始六年十月十七日、於中寺出。……」とある。そして、費長房は筆を改めて、「右一部合五十八卷、……延請多羅憩於中寺誦出十誦律梵本。鳩摩羅什度為秦文*」（秦文は宋、元、明三本では秦言）と述べている（『大正藏』49巻、77頁、中段）。弗若多羅は梵本を誦出したのであり、実際の訳出者は鳩摩羅什である。なお、『十誦律』には「衣械受」（『大正藏』23巻、359頁、下段）という箇所もある。
- 15）註7）。なお、「衣械」という語は、23頁、下段、24頁上、中段にもある。
- 16）『出三』巻二の鳩摩羅什の項に「自在王經二卷」とあり、その割註に「弘始九年出」とある。『出三』巻八所収の僧叡法師「自在王經後序」（『大正藏』55巻、59頁、中段）参照。
- 17）「摩訶僧祇律私記」（『大正藏』22巻、548頁、中段）および『出三』巻三の「新集律来漢地四部序録」に収録されている「婆薮富羅律」という見出しの文のなかに（『大正藏』55巻、21頁、上段）に義熙十四年二月末に訳了したことが述べられている。
- 18）『出三』巻四の「条新撰目錄闕經。未見經文者如左」とある中に「如来智印經一卷」とあり、割註に「先闕」（『大正藏』55巻、32頁、中段）とある。『如来智印經』なるものは現存し、『大正藏』15巻（468頁、中段—474頁、下段）に収録されている。その経題の次に「僧祐云闕訳人、今附宋録」とあり、脚註には、「僧祐録失訳（宋本、宮本）、僧祐録失訳人、開元附劉宋（元本）、僧祐録失訳人名、開元附劉宋録（明本）」（『大正藏』15巻、468頁）とある。そして、『開元釈教録』巻五（『大正藏』55巻、535頁、中段）に「然祐録中但云失訳、不標年代。今且附宋録末。」とある。本稿では、訳出者や訳出年等が分明でなく、恐らく鳩摩羅什以後の人による訳出であると思われるので、この經典については取り上げない。ただし、「皆以衣械、盛七宝華、各五百裏以散仏上」（『大正藏』15巻、471頁、中段）という箇所が

『阿弥陀經』における「衣械」という語について

あり、「衣械」という語、そして「皆以衣械、盛七宝華」という表し方は竺法護や鳩摩羅什の訳語、訳し方と同じである。

- 19) 『出三』巻二の吉迦夜・曇曜の項に三部のうちの一經として「雜宝藏經十三卷」とあり、その割註に「闕」とし、三經を挙げた後で「右三部凡二十一卷。宋明帝時、西域三藏吉迦夜、於北国以偽延興二年、共僧正积曇曜訳出。劉孝標筆受。此三經並未至京都」とする。智昇撰『開元釈教録』（以下『開元録』という）巻六には、「雜宝藏經八卷」を挙げ、その割註に「録云十三卷。未詳。今只有八卷」（『大正藏』55巻、540頁、上段）とある。『大正藏』4巻所収の現存『雜宝藏經』は十巻に分巻されている。
- 20) 『三宝紀』巻十二の那連提耶舍の項に八部の訳經のうちの一經として、「大莊嚴法門經二卷」を挙げ、その割註に「開皇三年正月出」（『大正藏』49巻、102頁、下段）とある。
- 21) 『開元録』巻九の義浄の項に「根本説一切有部毘奈耶雜事四十巻」とあり、その割註に「景龍四年、於大薦福寺翻經院訳」（『大正藏』55巻、568頁、上段）とある。
- 22) 註8）。
- 23) 藤田宏達、前掲書、35—51頁、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房仏書林、1993年）30—51頁。
- 24) 『大正藏』49巻、62頁、中段。
- 25) 註10）。
- 26) 註11）。
- 27) 『大正藏』10巻、570頁、中段。
- 28) *Daśabhūmīśvaro nāma mahāyānasūtram*, ed. by Rūko Kondo (Rinsen Buddhist Texts Series II, Kyoto, 1983) p.192, ll.14-15.
- 29) 『大正藏』12巻、288頁、中段。
- 30) 『大正藏』12巻、272頁、下段。
- 31) *Sukhāvatī-vyūha*, édité par Atsuuji Ashikaga, Kyoto, 1956, (以下 *Sukh.* という) p.44, ll.5-8.
- 32) 註1）。
- 33) 『大正藏』12巻、349頁、上段。
- 34) 河口慧海「藏和对訳・阿弥陀經」の藏訳（底本はナルタン版）（『浄土宗全書』23、『梵藏和英合璧・浄土三部經』所収、山喜房仏書林、1972年、再版）344頁、19—21行。
- 35) 中村元「阿弥陀經チベット訳について」（『岩井博士古希記念典籍論集』、開明堂、1963年）425頁。
- 36) 池田澄達『初等西藏語読本』（山喜房仏書林、第3版）10頁、7行。
- 37) *The Smaller Sukhāvatī-vyūha, Description of Sukhāvatī, the Land of*

- Bliss, Collaterating Sanskrit, Tibetan, Chinese Texts with Commentarial Foot Notes, Part I, ed. by Hideo Kimura, Ryukoku University, Kyoto, 1943, p.21.
- 38) 註2)。
- 39) 藤田宏達「カトマンドゥにおける *Sukhāvativyūha* の写本」(中村元博士還暦記念論集『インド思想と仏教』、春秋社、1973年) 229頁。
- 40) 註31) の *Sukh.* のこと。
- 41) *The Larger Sukhāvativyūha, Romanized Text of the Sanskrit Manuscripts from Nepal.*, Part I, 1992, Part II, 1993, Part III, 1996, by Kotatsu Fujita, Sankibo, Tokyo.
- 42) *Sukh.*, p.50, l.12, l.14, l.15, l.16, l.19.
- 43) ただし、本稿の後の方で取り上げる、『足利刊本』の「東方偈」第6偈中の *puṣpapuṭāhi* と第7偈中の *puṣpapuṭā* については、韻律の関係か、『写本ローマ字本集成』(下巻、981頁、Af、983頁、Af) においては第6偈は *puṣpapuṭēhi*、第7偈は *puṣpapuṭā* と修正されているが、*puṭa* については、諸写本ならびに本稿で取り上げた他の初期大乘經典の用例からすると、*pūṭa* ではなく、*puṭa* であるように思われる。韻律の件は、*puṭa* を生かして検討されることが望ましいのではないかと、僭越ながら愚考する。
- 44) 『大正蔵』9巻、12頁、中段。
- 45) *Saddharmapuṇḍarīka-sūtram, Romanized and Revised Text of the Bibliotheca Buddhica Publication by Consulting A Skt. Ms. & Tibetan and Chinese Translations.*, by U. Wogihara and C. Tsuchida, Tokyo, 1934, p.70, ll.10-12 (以下 *SaddhP.* という。)
- 46) 『大正蔵』9巻、23頁、上、下段。24頁、上、中段。註15) 参照。
- 47) 『大正蔵』9巻、23頁、上段。
- 48) *SaddhP.*, p.148, l.18-p.149, l.6. なお、ここに挙げた『十地經』には、*puṣpapuṭāṃ teṣāṃ buddhānāṃ bhagavatāṃ kṣipati* ([かれは] 花々のもろもろの *puṭa* をかの諸仏・諸世尊に撒き散らす。)。とあるように、*puṣpapuṭa* は Acc. で表されているが、『法華經』では、*taṣ ca . . . puṣpapuṭais taṃ bhagavantam abhyavakiranti sma* (そして、[かれらは] かの花々のもろもろの *puṭa* をかの世尊に散らした。)。とあるように、動詞が√*kṛ* の場合には、—これは『無量寿經』でも同じことである(一例を挙げれば、*Sukh.*, p.50, ll.14-16.) が—、*puṣpapuṭa* は Ins. で表されている。これは、『マハーバーラタ』(ed. by V. S. Sukthankar, Poona, 1936) でも、たびたび出てくる戦場の記述の中に、例えば、*Duḥsahāḥ savivimśatiḥ avākīrac charais tikṣṇaiḥ* (4・56・25) (ドゥフサハとヴィヴィンシャティは鋭い矢を降り注いだ。) とあるように、日本語としては、*puṣpapuṭ-*

『阿弥陀經』における「衣被」という語について

ais や śarais を「～を」と訳しても差し支えないと思う。チベット訳やこれまでの和訳も、そのように訳している。

- 49) 『大正蔵』9巻、90頁、中段。
- 50) 諸橋轍次『大漢和辞典』巻10（縮写版、大修館書店、1967年）、170頁。
- 51) 同上、217—218頁。
- 52) *The Student's Sanskrit-English Dictionary*, by V.S. Apte, first edition 1890, p.339.
- 53) *A Sanskrit-English Dictionary*, by Monier Monier-Williams, first edition 1899, p.631. なお、Apte の *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Revised & Enlarged Edition, 1957 (Kyoto, Rinsen Book Company, Second Reprinting, 1986, p.1027.) では、“9. A cloth worn to cover the privities.”を加えている。
- 54) *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, ed. by T.W. Rhys Davids and William Stede, first published 1921-1925, p.464.
- 55) *The Jātaka*, Vol. V, ed. by V. Fausbøll, PTS., 1963, p.441, ll.29-31.
- 56) 龍山章真訳註『梵文和訳・十地經』（破塵閣、1938年、再版、国書刊行会、1982）223頁。
- 57) 川瀬光順『大乘道の実現・梵文十地經現代語訳註』（富山房、1942年）352頁。
- 58) 荒巻典俊訳『十地經』（『大乘仏典』第8巻、中央公論社、1974年）330頁。
- 59) 南条文雄『支那五訳対照梵文和訳仏説無量寿經・支那二訳対照梵文和訳仏説阿弥陀經』（無我山房、初版、1908年、第3刷、平楽寺書店、1958年）205頁。なお、マックス・ミュラーの英訳は“bunches of flowers”となっている（*The Larger Sukhāvati-vyūha*, translated by F. Max Müller, Sacred Books of the East, Vol.49, Part II, Oxford, 1894, p.47）。荻原雲来「梵和对訳・無量寿經」（『浄土宗全書』23、「梵蔵和英合璧・浄土三部經、山喜房仏書林、1972年、再版）107頁。
- 60) 大谷光瑞『梵文原本和訳・無量光如来安樂莊嚴經』（京都、光寿会、1929年）95頁。
- 61) 中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『浄土三部經』（上）無量寿經（岩波文庫、1963年、改訂版、1991年）81頁。岩本裕「大無量寿經・極楽の素晴らしく見事な景観」（『仏教聖典選』第6巻「大乘経典（4）」所収、読売新聞社、1974年）130頁。
- 62) 藤田宏達訳『梵文和訳・無量寿經・阿弥陀經』（法蔵館、1975年）111頁。
- 63) 山口益・桜部建訳「無量寿經」（『大乘仏典』第6巻、中央公論社、1976年）63頁。
- 64) 河口慧海、前掲書、345頁。
- 65) 寺本婉雅訳註「西藏所伝・仏説阿弥陀經」（『蔵漢和三体合璧仏説無量寿經・仏説阿弥陀經』所収、国書刊行会、1981年、再版）96頁。
- 66) 南条文雄・泉芳璟共訳『梵漢対照・新訳法華經』（初版、1913年、平楽寺書店、

『阿弥陀経』における「衣鉢」という語について

- 1971年、第6刷) 187頁。
- 67) 岩本裕訳『法華経』(中)(岩波文庫、1964年、第1刷) 35頁。
- 68) 松涛誠廉・長尾雅人・丹治昭義訳『法華経』I (『大乘仏典』第4巻、中央公論社、1975年) 194頁。中村瑞隆『現代語訳・法華経』上(春秋社、1995年) 161頁。
- 69) 中村瑞隆、同上書、161頁。同じ *puṣpapuṭa* という語が、明らかに同じ物でありながら、「花[華][を盛った]器(衣鉢)」と「花のうてな」というように訳し分けられている。
- 70) *Sukh.*, p.44, ll.13-16.
- 71) *Daśabhūmiśvaro nāma mahāyānasūtram*, p.192, l.14-p.193, l.2. なお、拙稿「極楽の莊嚴 (*vyūha*) について」(『同朋大学論叢』第74・75合併号、1996年) におけるこの箇所の和訳(35頁)を、本稿の和訳のように訂正する。
- 72) 辻直四郎『サンスクリット文法』(『岩波全書』280、1974年、第1刷) 230頁参照。
- 73) *Sukh.*, p.44, l.21-p.45, l.4. ただし、第6偈初めの *te puṣpapuṭāhi samokiranti* は京大写本 Ky によって *te puṣpapuṭebhi punā kiranti* とする(『写本ローマ字本集成』下巻、981頁、3行目)。
- 74) *Ibid.*, p.50, ll.16-23.